



田口理穂 * ドイツのエコあれこれ

No. 12

キームガウアー地域通貨。 3%をお気に入りの団体に寄付

南ドイツのオーストリア国境そばにキームガウアー湖がある。その周辺で使われているキームガウアー地域通貨（以下、キ通貨）は2018年に15周年を迎えた。この地域通貨の特徴は使った額の3%が地域内の公益団体の寄付となること、そしてお金の価値が半年ごとに3%減ることだ。

日本でもシュタイナー学校で知られるルドルフ・シュタイナーは「物は古くなれば価値が減るのに、お金だけ減らないのはおかしい」「経済活動を通じて余剰に生まれたお金は文化や芸術、教育に使うべき」と考えた。

この考え方をもとにクリスチアン・ゲレリさんは16年前、南ドイツのシュタイナー学校で生徒たちとキ通貨を始めた。もともと体育館の費用を集めるため、提携している店で買い物すると、店が買い物額の3%を学校に寄付するというしくみだった。

今では周辺自治体に広がり、オーガニック店やレストラン、薬屋、書店、建築事務所など約430の事業所が参加している。ローゼンハイム電力公社では、エコ電力を地域通貨で支払うことができる。

寄付を受けるのは福祉施設やスポーツ教室など300ほどあり、利用者は好きな団体を指定できる。

キ通貨はユーロと1対1で交換し、1、2、5、10、20の5種類の額の紙幣がある。最近は専用カード

により、キャッシュレスで利用できるようになった。

半年以上経つと、紙幣額の3%のシールを購入して貼らなければ使用できない。ユーロに再両替すると5%の手数料がかかる。使わないと価値が下がるため、ユーロと比較して4倍の回転数を誇る。貯めこまないことで、お金が地域で循環するのだ。

ゲレリさんは「贈与、エコロジー、地域性を大事にしている」という。「半年ごとに3%価値が下がるときくと、多くの人はどうしてと考えるだろう。それだけでこの試みは価値がある。現在のような貧富の差や競争、成長圧力の経済システムではなく、協力して一緒に生きてく社会・経済システムがあるのを知ってほしい」と話す。

確かに食べ物や日用品、建物など物



牛や風車、花など地元の風景をモチーフにしたキームガウアーリー紙幣

sorting

は価値が下がるのに、お金は価値が下がらず、それどころか利子がつく。お金の9割は物を生み出すためではなく、投機などお金がお金を生むためにやりとりされている現状に、一石を投じたい考えだ。

日本でも地域通貨はあるが、徐々に下火になったり、広まりにくいと聞く。キ通貨もすべて順風満帆というわけではない。しかし3%を好きな団体に寄付する方法は、地域通貨に新たな価値を与えるのではないか。

キ通貨事務所のひとりが「多くの人が安いとかお得とかそういうことはかなり気にするが、ここでは3%が他人に与えられる！ 地域活動のために使われるんだ」と、生き生きと語っていたのが印象的だった。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録



日本では家族のことを人前でほめませんが、ドイツでは妻や夫、子どもをよくほめます。家族はもっとも近い他人であり、尊重すべきだから。

「明がわがままで困る」「きのうもまた泣いた」と仲のいいママ友に話していると、明は耳ざとく聞きつけ「どうしてぼくの悪口いうの。イメージを壊さないようにしてるので、ひどい！」と怒ります。悪口じゃなく事実なのに。

日本のように「うちの子はダメだから」

と謙遜する文化はないので慣れていない。だんだん成長てきて、個人として認めてくれというサインもあるでしょう。

ちなみに先日、福島について講演したとき、待ち受け画面にしていたぬいぐるみと遊ぶ明の写真が一瞬スクリーンに映し出されてみんなに見られ、明は「恥ずかしい！」とカクカク。今月、撮ったお気に入りの写真ですが…。

だんだん周りを気にする年頃になってきました。